

tions.  
International law.  
International private law.  
Law.  
Political science.  
History. Geography. Biography.

Sociology.  
Economics.  
Industry. Transportation.  
Others.  
Appendix.  
洋雑誌

(千葉範子)

## 『西垣文庫目録』(昭和六一年六月刊)

校友・故西垣武一氏(明治三四年—昭和四二年)の蒐集になる図書資料で、ご遺族より母校の図書館に寄贈された「西垣文庫」の冊子目録が昨年六月刊行された。

これは、本館が架蔵する特殊コレクションの目録としては、第一一輯にあたる。西垣氏は、昭和二年に本学政治経済学部を卒業、旧報知新聞社を経て博報堂に入り、広告業務を主として担当された。昭和二年に独立し、広告代理店三栄広告社を設立、四二年春逝去されるまで社長として活躍、戦前戦後をつうじて、広告界の第一線にあり、広くマスコミ界にも貢献された。

早くからジャーナリズムに関心を持ち、戦前既にかなりの新聞と関連の文獻を蒐集・所蔵しておられたが、全てを戦

火で失った。戦後再び蒐集を始め、これをもとに昭和三年に日本新聞資料協会を創立し、研究者の連絡と協力促進をはかられた。

日本の近代史の流れを報道した一葉一片の資料の消滅と散佚を憂い、志を一起する同攻の士に協力を呼びかける辞を、西垣氏は会長として協会の機関誌月刊『新聞資料』創刊号(昭和三四年一月)に寄せられている。

『新聞資料』はその後、ジャーナリズム関係資料の発掘と紹介を精力的におこなったが、氏の急逝で協会の活動が罷むとともに一〇一号をもって刊行を中止した。

西垣氏の逝去の翌年、静枝夫人より阿部賢一先生(元総長)の仲介で、図書館に寄贈されたこれらの資料は、早速整

理・目録化され利用に供されてきたが、今回冊子目録が刊行され、これに未整理であった図書以外の資料の目録も収録されたことから、「西垣文庫」の全貌が一望されることとなった。

文庫に収める資料点数は、全て二一、〇〇〇、内訳は図書六、七二二冊(内洋書一九九冊)、雑誌五七七誌、新聞一二九種、錦絵・引札等の一枚物四、七九二点、貼込帖等九四部、江戸期のものを含む看板実物・巻軸物六五点となる。

これらが以下の部立てに整理目録化されている。

### 和漢書の部

新聞・ジャーナリズム

広告・宣伝

風俗・習慣

その他一般

### 資料の部

新聞・雑誌関係

広告・商標類

看板

雑誌資料

### 逐次刊行物の部

新聞

雑誌

新聞・雑誌特集号

### 洋書の部

索引は、著者、書名のものが付されているが、資料と逐次刊行物についてはこれを省略した。

内容について簡単に触れておく。新聞関係は、草創期の新聞実物、新聞・マスコミ論、編集実務、新聞社社史を含めた新聞・ジャーナリズム史、新聞人の伝記・著作および書簡等の自筆資料である。

広告・宣伝類も、理論から実際の看板、引札、チラシ、マッチのレッテルに至るまで多種にわたる。

もう一つの特徴は、社会風俗に関する資料群である。西垣氏が事務所を置いた銀座に関するものをはじめ浅草ものなどの東京地理風俗、震災もの、料理、酒、煙草に関するの図書と資料である。

この文庫の多くの部分を占める資料ものは、図書館に寄贈された時点では、類別等が定まっておらずかなり雑然とした状態にあったが、これらが仕分けられ、必要に応じて套、帙に納めたり、貼込帖やクリア・ファイルに綴るなどして系統的に整理され、利用に便利となっている。

「西垣文庫」は、新聞・ジャーナリズムを中核としつつも、社会風俗全般にわたる幅広い資料群である。この目録により広範囲の研究者の利用に供され、諸学の発展に寄与するであろうことは想像す

るに難くない。またそれが、西垣氏とご遺族、西垣氏に協力してくださった方々

## 『柳田泉文庫目録』

(昭和六十二年五月刊予定)

近代文学研究の、とりわけ明治文学研究の泰斗として、その実証的な学風で知られた柳田泉先生が亡くなったのは、昭和四十四年六月七日、七十六歳であった。

先生のご遺志に従って、蔵書は図書館へ寄贈されることとなり、昭和四十八年九月、冊数にしておよそ一万四千冊、和漢洋の三学にわたるその収書が館蔵に帰した。

図書館では、受入の後、まず洋書を整理、続いて和漢書の一部に着手したが、諸般の事情により中断、その後再開の目途の立たぬまま、懸案の事項となつて数年が過ぎたが、去る五十九年六月、新図書館完成までにすべての滞貨図書の整理を完了させるといふ方針のもとに、特殊文庫整理班が館員三名をもつて発足、ようやく、柳田先生の蔵書を整理する本格的な態勢が整つたのであった。爾来二年四ヶ月が経過したが、今年度中には、柳田泉文庫として冊子目録が完成する見通しが立った。現在編集作業中であり、蔵

にとつても冀望するところであると思う。(金子宏二)

書の内容、目録の実際等詳しい報告をする段階にないが、ここに内容の一端を紹介し、整理の方針、留意した点など述べてみたい。

柳田先生の蔵書についてまず言うべき事は、和漢洋の三学にわたる、その収集の幅の広さ、資料の多様さといった点であらうか。和書があり、漢籍があり、洋書がある。和書について言えば、その年代も、幕末から昭和も四十年代まで、明治の変革期をはさんで「新旧」の資料がとぎれることなく集められている。新聞・雑誌があり、柳田先生自筆の稿本、門下生の手も混じる抜書類、新聞雑誌の切抜類等が、各々相当のタイトル数にのぼっている。過去に館蔵に帰した多くの文庫に見られない多様さである。

一方、資料の内容については、当然の事ながら、明治期のものに見るべきものが多い。花袋、露伴をはじめとする小説類、雪嶺、蘇峰らを中心とする社会評論、政治評論、「新体詩抄」以下の新体